

用借靈怨

花鏡泉

青空文庫

婦人は、座の傍かたわらに人氣のまるでない時、ひとりでは按摩あんまを取らないが可いいと、昔氣質むかしかたぎの誰でもそう云う。上かみはそうまでもない。あの下しもの事を言うのである。閨ねやでは別段に注意を要するだろう。以前は影絵、うつし絵などでは、巫山戯ふざけたその光景を見せたそうで。——御新姐ごしんぞさん、……奥さま。……さ、お横に、とこれから腰を揉もむのだが、横にもすれば、俯向うつむけにもする、一つくると返して、ふわりと柔くまた横にもしよう。水々しい魚うおは、真綿、羽二重まないたの俎なに寝て、術者はまな箸ばしを持たない料理人である。衣きぬを

透とおして、肉を揉み、筋を萎なやすのであるから恍惚うつとりと身うちが溶ける。ついたしなみも粗末になつて、下じめも解けかかれば、帯も緩くなる。きちんとしていてさえざつとこの趣。……遊山旅籠ゆさんはたご、温泉宿などで寝衣ねまき、浴衣に、扱しづき帯、伊達巻だてまき一つの時の様子は、ほぼ……お互に、しなくつても可よいが想像が出来る。膚はだを左右に揉む拍子に、いわゆる青練あおねりも溢こぼれようし、緋縮緬ひぢりめんも友染ゆうぜんも敷いて落ちよう。按摩かたをされる方は、対手あいてを盲めくらにしている。そこに姿の油断がある。足くびの時などは、一応は職業行儀に心得て、太ふくらはぎ脛からから曲げて引上げるのに、すんなりと衣服きものの裾つまを巻いて包むが、療治をするうちには双方の氣のたるみから、踵かかとを摺ずり下さがつて裾が波のようにはらりと落ちると、包ましい膝のあたりから、

白い踵が、空にふらふらとなり、しなしなとして、按摩の手の裡うちに糸の乱るるがごとく纏もつれて、艶えんに媚なまめかしい上搔うわが、下搔したがい、ただまんじともえ巴まに降る雪の中を倒さかしに歩行く風情になる。バツタリ真ま暗くらになつて、……影絵は消えたものだそうである。

——聞くにつけても、たしなむべきであらうと思う。——

が、これから話す、わが下町娘したまちつこのお桂ちゃんけい——いまは嫁して、河崎夫人であるのに、この行為、この状があつたと言うのでは決してない。

問題に触れるのは、お桂ちゃんなきひとの母親で、もう一昨年頃故入なきひとの数に入つたが、照降町てりふりちやうの背負商しよいあきないから、やがて宗右衛門町むねえもんの角地面に問屋となるまで、その大島屋の身代八分は、その人

の働きだったと言う。体量も二十一貫ずツしりとした太腹ふとつばらで、女長兵衛と称たたえられた。――末娘すえつこで可愛いお桂ちゃんに、小遣こづかの出振だしつぷりが面白い……小買ものや、芝居へ出かけに、お母さんが店頭みせさきに、多人数立働く小僧中僧わかしゆ若衆わかしゆたちに、気は配つても見ないふりで、くくり頤あごの福々しいのに、円々とした両りようひ肱じの頬杖ほおづえで、薄眠はくみりをしている、一段高い帳場の前へ、わざと澄ました顔して、（お母さん、少しばかり。）黙つて金箱から、ずらりと掴つかみ出して渡すのが、掌てのひらが大きく、慈愛が余るから、……瘦やせぎすで華奢きゃしゃなお桂ちゃんの片手では受切れない、両の掌に積んで、銀貨の小粒なのは指からざらざらと溢こぼれたと言う。……亡きあとでも、その常用だった粗末な手ぶんこの中に、なおざり

にちよつと半紙に包んで、（桂坊へ、）といけぞんざいに書いたものを開けると、水晶の浄土珠数一聯、とつて十九のまだ嫁入前の娘に、と傍で思つたのは大違ひ、粒の揃つた百幾顆の、皆真珠であつた。

姉娘に養子が出来て、養子の魂を見取つてからは、いきぬきに、時々伊豆の湯治に出掛けた。——この温泉旅館の井菊屋と云うのが定宿で、十幾年来、馴染も深く、ほとんど親類づき合ひになつてゐる。その都度秘蔵娘のお桂さんの結綿島田に、緋鹿子、匹田、絞の切、色の白い細面、目に張のある、眉の優しい、純下町風俗のを、山が育てた白百合の精のように、袖に包んでいたのは言うまでもない。……

「……その大島屋の先の大きいおかみさんが、ごふびんに思召おぼしめしましてな。……はい、ええ、右の小僧按摩を——小一こいちと申したでござりますが、本名で、まだ市名いちなでも、齋号でもござりません、……見た処ちが余り小こいので、お客様方には十六と申す事に、師匠も言いきけてはありますし、当人も、左様に人様には申しておりましたが、この川の下流の釜ヶ淵かまふち——いえ、もし、渡月橋とげつきようで見えます白糸の滝の下……あれではござりません。もつとずつと下流になります。——その釜ヶ淵へ身を投げました時、——小一はたちは二十で、従つて色気があつたでござりますよ。」

「二十にならなくつたつて、色気の方は大丈夫あるよ。——私が手本だ。」

と言つて、肩を揉ませながら、快活に笑つたのは、川崎欣七きんしち
 郎ろう、お桂ちゃんの夫で、高等商業出の秀才で、銀行員のいい処、
 年は四十だが若々しい、年齢にちと相違はあるが、この縁組に申
 分はない。次の室まつき井菊屋の奥、香都良川添かつらがわぞいの十畳に、もう床
 は並べて、膝まで沈むばかりの羽根毛蒲団はねぶとんに、ふつくりと、たん
 ぜんで寛くつろいだ。……

寢床すべを這すべつて、窓下の紫檀したんの机に、うしろ向きで、紺地に茶の
 縞しまお召あわせばおりの拾羽織なでがたを、撫肩なでがたにぞろりと掛けて、道中の髪ときを解は
 放なし、あすあたりは髪結かみゆいが来ようという櫛くし巻まきが、房ふつさりしな
 がら、清らかな耳許みみもとに簪かんざしの珊瑚さんごが薄色に透通る。……男を知つ
 て二十四の、きじの雪が一層あくが抜けて色が白い。眉が意気で、

口許に情が籠こもつて、きりりとしながら、ちよつとお転婆に片棲かたづまの緋の紋縮緬もんちりめんの崩れた媚なまめかしさは、田舎源氏の——名も通う——桂樹かつらぎという風がある。

お桂夫人は知らぬ顔して、間違つて、愛読する……泉の作で「山吹」と云う、まがいものの戯曲を、軽い頬杖で読んでいた。

「御意で、へ、へ、へ、」

と唯今ただいまの御前ごぜんのおおせに、恐入こいりつた体ていして、肩からずり下つて、背中でお叩頭じぎをして、ポンと浮上うきあつたように顔を擡もたげて、鼻をひこひこと行やつた。この謙斎坊さんは、座敷は暖かだし、精を張はつて、つかまつたから、十月の末だと云うのに、むき身紋しぼりの襦じ袢ばん、大肌脱おおはだぬぎになつていて、綿八丈の襟の左右へ開はけた毛だら

けの胸の下から、紐ひものついた大蝦蟇口おおがまぐちを溢はみだ出させて、揉んでいる。

「で、旦那だんな、身投げがござりましてから、その釜ヶ淵……これは

ただ底が深いというだけの事でありましょうで、以来そこを、提ちようちん

灯ヶ淵——これは死にます時に、小一めいどが冥途を照しますつも

りか、持っておりましたので、それに、夕顔ヶ淵……またこれは、その小按摩に様子が似ました処から。」

「いや、それは大したものだな。」

くわっ、とただ口を開けて、横向きに、声は出さずに按摩が笑つて、

「ところが、もし、顔が黄色膨れの頭でつかち、えらい出額おでこで。」

「それじゃあ、夕顔の方で迷惑だろう。」

「御意で。」

とまた一つ、ずり下りざまに叩頭おしぎをして、

「でござりますから瓢箪淵ひょうたんふちとでもいたした方が可よかろうかと

も申します。小一の顔色かおつきが青瓢箪を俯向うつむけにして、底を一つ叩

いたような塩梅あんばいと、わしども家内なども申しますので、はい、

背が低くって小児こども同然、それで、時々相修業に肩につかまらせた

事もござりますが、手足は大人なみに出来ております。おおき大な日和ひよ

下駄りげたの傾かしいだのを引摺ひきずって、——まだ内弟子の小僧ゆえ、身分で

はござりませんから羽織も着ませず……唯今頃はな、つんつるて

んの、裾すそのまき上った手織縞か何かで陰気な顔を、がつくりがつ

くりと、振り振り、（ぴい、ふう。）と笛を吹いて、杖つづを突張つぱつ

て流して歩ある行きますと、御存じのお客様は、あの小按摩の通る時は、どうやら毛の薄い頭の上を、不具かたわの鳥が一羽、お寺の山から出て附ゆいて行くと申されましたもので。——心こころ掛かけの可よい、勉強家で、まあ、この湯治場は、お庇かげ様とお出入でいりさきで稼はぎがつきます。流さずともでござりますが、何も修業と申して、朝も早くから、その、（ぴい、ぷう。）と、橋を渡りましたり、路地ろぢを抜けましたり。……それが死にましてからはな、川向うの芸妓げいしや屋道やに、どんな三味線が聞えましても、お客様がたは、按摩の笛というものをお聞きになりますまいでござります。何のまた聞えずともではござりますがな。——へい、いえ、いえそのままでお宜よろしゅう……はい。

そうした貴方様、勉強家でござりました癖に、さて、これが療治に掛りますと、希代にのべつ、坐睡いねむりをするでござります。古来しゅうとめ、姑の目ざといのと、按摩の坐睡は、遠島ものだといったしたくらいなもので。」

とばちばちと指を弾はじいて、

「わしども覚えがござります。修業中小僧のうちは、またその睡ねむい事が、大蛇を枕でござりますて。けれども小一のははげしいので……お客様の肩へつかまりますと、——すぐに、そのくくりこくり。……まず、そのために生命いのちを果しましたような次第でござります。」

「何かい、歩きながら、川へ落おっこちでもしたのかい。」

「いえ、それは、身投みなげで。」

「ああ、そうだ、——こつちが坐睡をしやしないか。じゃ、客から叱言こしごが出て、親方……その師匠にでも叱られたためなんだな。」

「……不断の事で……師匠も更あらためて叱言を云うがものはござりません。それに、晩も夜中も、坐睡つてばかりいると申すでもござりませんでな。」

「そりやそうだろう——朝から坐睡っているのでは、半分死んでいるのも同じだ。」

と欣七郎は笑つて言つた。

「春秋の潮時でもござりましょうか。——大島屋の大きいお上かみが、半月と、一月、ずつと御逗留ごとうりゆうの事も毎度ありました、その御

逗留中というと、小一の、持病の坐睡がまた激しく起ります。」

「ふ——」

と云つて、欣七郎はお桂ちゃんえりもとの雪の頸許くすぐに、擦すりつたような目を遣やつた。が、夫人は振向きもしなかつた。

「ために、主でいりな出入場の、御当家では、方々のお客さんから、叱

言が出ます。かれこれ、大島屋さんのお耳にも入りますな、おか

みさんが、可哀相な盲小僧だ。……それ、十六七とばかり御承知

で……肥こえふと満みつて身体からだが大いおおきから、小按摩一人肩の上で寝た処で、

かまぎつちよ

蟪あし 螂あしが留とどまつたほどにも思おもわない。冥利みょうりとして、ただで、

お銭あしは遣やれないから、肩で船を漕こいでいなと、毎晩のように、お

慈悲で療治をおさせになりました。……ところが旦那。」

と暗い方へ、黒い口を開けて、一息して、

「どうも意固地いこじな……いえ、不思議なもので、その時だけは小按摩が決して坐睡をいたさないでござります。」

「その、おかみさんには電気でもあつたのかな。」

「へ、へ、飛んでもない。おかみさんのお傍そばには、いつも、それは綺麗な、美しいお嬢さんが、大好きな、小説本を読んでいるのでござります。」

「娘ツ子が読むんじゃあ、どうせ碌ろくな小説じゃあるまいし、碌な娘ではないのだろう。」

「勿体もったいない。——香都良川には月がある、天城山あまぎやまには雪が降る、井菊の霞に花が咲く、と土地ではやしましたほどのお嬢さん

でござりますよ。」

「按摩さん、按摩さん。」

と欣七郎が声を刻んだ。

「は、」

「きみも土地じゃ古顔だと云うが。じゃあ、その座敷へも呼ばれただろうし、療治もしただろうと思うが、どうだね。」

「は、それが、つい、おうわさばかり伺いまして、お療治はいたしません、と申すが、此屋様こちらなり、そのお座敷は、手前同業の正齋と申す……河豚ふぐのようではござりますが、腹に一向の毒のない男が持分に承っておりますので、この正齋が、右の小一の師匠なのでござりまして。」

「成程、しかし狭い土地だ。そんなに逗留をしているうちには、きみなんか、その娘ツ子なり、おかみさんを、途中で見掛けた——いや、これは失礼した、見えなかったね。」

「旦那、口幅くちはばつとうはござりますが、目で見ますより聞く方が確たしかでござります。それに、それお通りだなどと、途中で皆がひそひそ遣ります処へ出会いますと、芬ぶんとな、何とも申されません匂が。……温泉から上りまして、梅の花をその……嗅かぎますようで、はい。」

座には今、その白梅よりやや淡青うすあおい、春すもの李もの薫かおりがしたろう。うつかり、ぷんと嗅いで、

「不躰ぶしつけ。」

と思わずしやべった。

「その香の好^よさと申したら、通りすがりの私どもさえ、寐^ねしなに衣^きものを着換えましてからも、身うちが、ほんのりと爽^{さわ}いで、一晩、極楽天上の夢を見ただござりますで。一つ部屋で、お傍にでも居ましたら、もう、それだけで、生命^{いのち}も惜しゅうはござりますまい。まして、人間のしいなでも、そこは血^ち氣^けの若い奴^{やつ}でござります。死ぬのは本望でござりましたろうが、もし、それや、これやで、釜ヶ淵へ押^おばまったでござりますよ。」

お桂のちよつと振返った目と合つて、欣七郎は肩越に按摩を見た。

「じゃあ、なにかその娘さんに、かかり合いでもあつたのかね。」

二

「飛んだ事を、お嬢さんは何も御存じではござりません。ただ、死にます晩の、その提ちようちん灯の火を、お手ずから点けて遣わされただけでござります。」

お桂はそのまま机に凭よつた、袖が直つて、八口やつくちが美しい。

「その晩も、小一按摩が、御当家へ、こツつりこツつりと入りまして、お帳場へ、精しょうりよう霊だな棚からぶら下りましたように。――

もつとももう時雨の頃で――その瓢ひようたん箆頭うづむを俯向けますと、

（おい、霞の五番さんじゃ、今夜御療治はないぞ。）と、こちら

に、年久しい、半助と云う、おくりむかえ送迎なり、やどひき宿引なり、手代なり、……頑固で、それでちよつとひようきん剽軽な、御存じかも知れません。威勢のいい、」

「あれだね。」

と欣七郎が云うと、お桂は黙つてうなず頷いた。

「半助がそう申すと、びしやびしやと青菜に塩になりましたつけが、（それでは外ほかさま様を伺います。）（ああ、行つて来な。内じやお座敷を廻らせないんだが、お前の事だ。）もつとも、（霞の五番さん）大島屋さんのお上さんの他ほかには、好んで揉もませ人てはござりません。——どこをどう廻りましたか、宵に來た奴が十時過ぎ、船を漕こいだものが故郷へ立帰ります時分に、ぽかんと帳場へ

戻りまして、^{かしこま}畏つて、で、帰りがけに、（今夜は闇で^{やみ}ございます、提灯を一つ。）と申したそうで、（おい、来た。）村の衆が出入りの便宜同様に、気軽に何心なく出したげで。——ここがその、少々変な^{あんばい}塩梅なのでござりまして、先が盲だとも、盲だからとも、^{ないし}乃至、目あきでないとも、そんな事是一向心着かず……それには、ひけ頃で帳場もちよつとごたついていたでもござりましようか。その提灯に火を^{とも}点してやらなかったそうでござりますな。——後での話でござりますが。」

「おやおや、しかし、ありそうな事だ。」

「はい、その提灯を霞の五番へ持つて参じました、小按摩が、逆戻りに。——（お桂様^{さん}。）うちのものは、皆お心安だてにお名を

申して呼んでおります。そこは御大家でも、お商人あきんどの難有ありがたさ

で、これがお邸やしきづら……」

くしゃみでそこな

嚏くしゃみの出損でそこなった顔をしたが、半間はんまに手を留めて、腸はらわたのごとく手

ぬぐい

拭ぬぐいを手繰り出して、蝦蟇がまぐち口の紐からに搦からむので、よじつて俯うつむけに

額ふを拭いた。

意味は推するに難くない。

欣七郎は、金きんぐち口くちを点けながら、

「構わない構わない、俺も素町人だ。」

「いえ、そういうわけではござりませんが。——そのお桂様に、

くちやみ

（暗闇くらやみの心細さに、提灯を借りましたけれど、盲に何が見える

と、帳場で笑いつけて火を貸しません、どうぞお慈悲……お情なさけに

。と、それ、不具根性、^{かたわ}僻んだ事を申します。お上さんは、もうお床で、こう目をぱつちりと見てござったそうにござります。ところで、お娘ごは何の気なしに点けておやりになりました。――さて、霞から、ずっと参れば玄関へ出られますものを、どういうものか、廊下々々を大廻りをして、この……花から雪を掛けて千鳥に縫って出ましたそうで。……井菊屋のしるしはござります、が、陰気に灯して、^{とも}暗い廊下を、黄色な鼠の霜げた小按摩が、影のように通ります。この提灯が、やがて、その夜中に、釜ヶ淵の上、土手の夜泣松の枝にさがって、小一は淵へ、^{いわ}巖の上に革緒の足駄ばかり、と聞いて、お一^{ひとかた}方病人が出来ました。……」

「ああ、娘さんかね。」

「それは……いえ、お優しいお嬢様の事でござります……親しく出入をしたものが、身を投げたとお聞きなされば、可哀相——とは、……それはさ、思召したでござりましょうが、何の義理時宜じんぎに、お煩いなさつて可よいものでござります。病みつきましたのは、雪にござつた、独身の御老体で。……

かみがた京阪地の方だそうで、ながとうりゆう長逗留でござりました。——カチリ

、
」

と言つた。按摩には冴さえた音。

「カチリ、へへッへッ。」

とベソを掻いた顔をする。

欣七郎は引入れられて、

「カチリ?……どうしたい。」

「お簪が^{かんざし}抜けて落ちました音で。」

「簪が?……ちよつと。」

名は呼びかねつつ注意する。

「いいえ。」

婀娜^{あで}な夫人が言った。

「ええ、滅相な……奥方様、唯今ではござりません。その当時の事で。……上^{かみがた}方のお客が宵寐^{よいね}が覚めて、退屈さにもう一風呂とお出かけなさる障子際へ、すらすらと廊下を通つて、大島屋のお桂様が。——と申すは、唯今の花、このお座敷、あるいはお隣に当りましようか。お娘ごには叔父ごにならつしやる、富沢町さん

と申して両国の質屋の旦だんが、ちよつと異なる寸法のわかい御婦人と
おたのし御楽み、で、大いお上さんは、苦い顔をしてござつたれど、そ
おおきこは、長唄のお稽古ともだちか何かで、お桂様は、その若いのと
知合でおいでなさる。そこへ——ここへでござります……貴女あなたの
お座敷は、その時は別棟、向うの霞で。……こちらへ遊びに見え
ました。もし、そのお帰りがけなのでござりますて。

上方の御老体が、それなり開けると出會頭であいがしらになります。出口
が次の間で、もう床の入りました座敷の襖ふすまは暗し、また雪と申す
のが御存じの通り、当館切つての北国ほつくで、廊下も、それは怪けし
からず陰気だそうでござりますので、わしどもでも手さぐりでヒ
ヤリとします。暗い処を不意に開けては、若いお娘ご、吃驚びっくりも

なさろうと、ふと遠慮して立たつせえた。……お通りすがりが、何とも申されぬいい匂で、その香をたよりに、いきなり、横合の暗がりから、お白い頸^{えり}へ嚙^{かじ}りついたものがござります。」……

「……………」

「声はお立てになりません、が、お桂様が、少し屈^{かが}みなりに、颯^{さつ}と島田を横にお振りなすった、その時力チリと音がしました。思わず、えへんと咳^{せき}をして、御老体が覗^{のぞ}いてござった障子の破れめへそのまま手を掛けて、お開けなさると、するりと向うへ、お桂様は庭の池の橋がかりの上を、両袖を合せて、小刻みにおいでなさる。蝙蝠^{こうもり}だか、蜘蛛^{やっこ}だか、奴は、それなり、その角の片側の寝具部屋^{やぐべや}へ、ござりとも言わず消えたげにござりますがな。

たしか
確に、カチリと、簪かんざしの落ちた音。お拾いなすった間もなかった

がと、御老体はお目敏めざとい。……翌朝、気をつけて御覧なされると、

欄干が取附けてござります、巖いわぐみ組へ、池から水の落口の、きれ

いな小砂利の上に、巖の根に留まつて、きらきら水が光つて、も

し、小雨のようにさします朝晴の日の影に、あたりの小砂利は五ご

色しきに見えます。これは、その簪かんざしの橘たちばなが薬なに抱きました、真珠の威

勢かにも申しますな。水は浅し、拾うのに仔細しさいなかつたでござい

ますれども、御老体が飛んだ苦勞をなさいましたのは……夜具部

屋から、膠にか々粘々を筋を引いて、時なりませぬ蛞蝓なめくじの大き

なのが一匹……ずるずるとあとを輪取つて、舐なめ廻まわつて、ちよう

ど簪の見当の欄干の裏へ這はい込んだのが、屈んだ鼻のさきに見えま

した。——これには難儀をなすつたげで。はい、もつとも、簪がお娘ごのお髪へ戻りましたについては、御老体から、大島屋のお上さんに、その辺のな、もし、従つて、小按摩もそれとなくお遠ざけになったに相違ござりません、さ、さ、この上方の御仁でござりますよ。——あくる晩の夜ふけに、提灯を持った小按摩を見て、お煩いなさつたのは。——御老体に見れば、そこらの行がかり上、死際のめくらが、面当に形を顕わしたように思召しましたろうし、立入って申せば、小一の方でも、そのつもりでござりましたかも分りません。勿論、当のお桂様は、何事も御存じはないのでござります。第一、簪の力チリも、咳のえへんも、その御老体が、その後三度めにか四度めにか湯治にござつて、

（もう、あのお娘も、円鬘こまるまげに結われたそうな。実は、）これから帳場へも、つい出入でいりのものへも知れ渡りましたでござります。——ところが、大島屋のお上さんはおなくなりなさいます、あとで、お嫁入など、かたがた、三年にも四年にも、さっぱりおいでがござりません。もつともお栄え遊ばすそうで。……ただ、もし、この頃も承りますれば、その上方の御老体は、今年当月も御湯治で、つい四五日しごんちあとにお立ちかえりだそうでござりますが。——ふと、その方が御覧になったら、今度のは御病氣どころか、そのまま氣絶をなさろうかも知れませぬ。

——夜泣松の枝へ、提灯を下げまして、この……旧曆の霜月、二十七日でござりますな……真の暗やみの薄うすあかり明に、しよんぼ

りと踞かがんでおります。そのむくみ加減といい、瓢箪頭のひしやげ
 ました工合ぐあい、肩つき、そつくり正しょうのものそのままだと申すことで
 ……現に、それ。」

「ええ。」

お桂もぞツとしたように振向いて肩をすぼめた。

「わしどもが、こちらへ伺います途中でも、もの好きなのは、見
 て来た、見に行くと、高声で往来が騒いでいました。」

謙斎のこの話いごとの緒も、はじめは、その事からはじまった。

それ、谿たにがわ川の瀬、池水の調べに通かよつて、チャンチキ、チャン
 チキ、鉦かね入りに、笛の音、太鼓の響ひびきが、流れつ、堰せかれつ、星の

静しずかな夜に、波を打って、手に取るごとく聞えよう。

実は、この温泉の村に、新あらたに町制が敷かれたのと、山やま手のてに遊

園地が出来たのと、名所に石の橋が竣成したのと、橋の欄干に、

花電燈が点ついたのと、従って景氣が可よいのと、儲もうか

の一つさえ祭の太鼓は賑にぎわうべき処に、繁はん昌じようが合オオケストラ奏やを演る

のであるから、鉦は鳴す、笛は吹く、続いて踊らずにはいられない。

何年めかに一度という書入れ日がまた快晴した。

昼は屋台が廻めぐって、この玄関前へも練込げいしやれんんで来て、芸妓連は

地に並ぶ、雛おしやく妓やくたちに、町この女おんなが交まじって、一様いの花笠で、

湯の花踊と云うのを演やった。屋台のまがきに、藤、菖蒲あやめ、牡丹ぼたんの

造り花は飾ったが、その紅紫の色を奪つて目立ったのは、はだぬぎ膚脱
 の緋ひより、帯の萌葱もえぎと、伊達巻の鬱金うこん縮ちりめん緬で。揃つて、むら
 の白粉おしろいが上氣して、日向ひなたで、むらむらと手足を動かす形は、菜な
ばたけ畠であからさまに狐が踊つた。チャンチキ、チャンチキ、田舎
 の小春の長閑のどけさよ。

客は一統、女中たち男衆おとこしゅまで、挙こぞつて式台に立つたのが、
 左右に分れて、妙に隅を取つて、吹溜りふきだまのように重かさなり合う。真ま
んなか中へ拭ふきこ込んだ大廊下が通つて、奥に、霞へ架けた反橋そりはしが庭の
 もみじに燃えた。池の水の青く澄んだのに、葉ざしの日加減で、
 薄藍うすあいに、朧おぼろの銀に、青い金に、鯉の影が悠然と浮いて泳いで、
 見ぶつに交つた。ひとりお桂さんの姿を、肩を、棲つまを、帯腰を、

彩つたものであつた。

この夫婦は——新婚旅行の意味でなく——四五年来、久しぶりに——一昨日温泉へ着いたばかりだが、既に一週間も以前から、今日の祝日の次第、献立書^{がき}が、処々、紅の二重圈点^{ところどころくれない}つきの比羅^らになつて、辻々、堀、大寺の門、橋の欄干^{あら}に踞^あられて、芸妓^{げいしや}の屋台囃子^{やたいばやし}とともに、最も注意を引いたのは、仮装行列の催^{もよおし}であつた。有志と、二重圈点、かさねて、飛入勝手次第として、祝賀委員が、審議の上、その仮装の優秀なるものには、三等まで賞金美景を呈すとしたのに、読者も更^{あらた}めて御注意を願いたい。

だから、踊屋台の引いて帰る囃子の音に誘われて、お桂が欣七郎とともに町に出た時は、橋の上で弁慶に出会い、豆腐屋から出

る緋^ひ緘^{おどし}の武者を見た。床屋の店に立^{たち}掛^かつたのは五人男の随一人、だてにさした尺八に、雁^{かり}がねと札を着けた。犬だつて浮かれています。石垣下には、鶯^{あひる}が、がいがいと鳴立てた、が、それはこの川に多い鶺鴒^{せきり}が、仮装したものではない。

泰西の夜会の例に見ても、由来仮装は夜のものであるらしい。委員と名のる、もの識^{しり}が、そんな事は心得た。行列は午後五時よりと、比羅^{したた}に認^{したた}めてある。昼はかくれて、不思議な星のごとく、颯^{さつ}と夜の幕を切^あつて顕^{あらわ}れる筈^{はず}の処を、それらの英雄^{きやう}俠^{かく}客^{かく}は、髀肉^{ひにく}の歎^{たん}に堪^たえなかつたに相違ない。かと思えば、桶屋^{おけや}の息子の、竹を削^おつて大桤^{おおます}形^{がた}に組^くみながら、せつせと小僧に手伝^てわして、しきりに紙を貼^はつてゐるのがある。通りがかりの馬方と問答する。

「おいらは留めようと思つたが、この景氣じゃあ、とても引込んでいられない。」「はあ、何に化けるね。」「たこ風だ……黙つていてくれよ。おいらがからだ身体をそのまま大風に張つて飛歩行くんだ。

両方の耳にうなりをつけるぜ。」「たまげ魂消たの、一等賞ずらえ。」

「黙つててくんろよ。」馬がヒーンといなな嘶いた。この馬が迷惑した。

のそりのそりと歩ある行き出すと、はじめ、出会つたのは緋緘の武者で、続いて出たのは雁がね、飛んで来たのは弁慶で、争つて騎のうとする。揉もみに揉んで、太刀と長なが刀が左右へ開いて、尺八が馬上に跳返つた。そのかわり横よこ田圃へ振落された。

ただこのくらない間まだつたが——山の根に演芸館、花見座の旗を、今日はわけて、山鳥のごとく翻した、町の角の芸妓屋げいしやの前

に、先刻の囃子屋台が、大な虫籠のごとくに、紅白の幕のまま、
 寂寞せきばくとして据すわつて、踊子の影もない。はやく町中まちなか、一練ひとねりは
 練廻あまつて剩す処がなかったほど、温泉の町は、さて狭いのであつ
 た。やがて、新造の石橋で列を造つて、町を巡まわりすました後では、
 揃そろつてこの演芸館へ練込んで、すなわち放楽の乱舞となるべき、
 仮装行列を待顔はききよに、掃清さうせいめられた状さまのこのあたりは、軒提のきちようち
 灯んのつらなつた中に、かえつて不断より寂しかった。

峰の落葉が、屋根越に――

日蔭の冷い細流せせらぎを、軒に流して、ちようどこの辻の向角むこうかど
 に、二軒並んで、赤毛氈あかもうせんに、よごれ蒲団ぶとんを継つぎはぎしたような射
 的店やてきみせがある。達磨落しだるま、バツトの狙撃そげきはつい通りだが、二軒と

も、揃って屋根裏に釣った幽霊がある。弾丸が当たると、ガタリぎらぎらと蛇腹に伸びて、天井から倒に、いずれも女の幽霊が、ぬけ上った青い額と、縹色の細い頤を、ひよろひよろ毛から突出して、背筋を中反りに蜘蛛のような手とともに、ぶらりと下る仕掛けである。

「可厭な、あいかわらずね……」

お桂さんが引返そうとした時、歩手前の店のは、白張の暖簾のような汚れた天蓋から、捌髪さばがみの垂れ下った中に、藍色れんの片頬かたほに、薄目を開けて、片目で、置据えの囃子屋台を覗くように見ていたし、先隣さきどなりなのは、釣上げた古行燈ふるあんどんの破やぶれから、穴へ入ろうとする蝮まむしの尾のように、かもじの尖さきばかりが、ぶらぶら

と下っていた。

歸りがけには、武藏坊^{むさしぼう}も、緋緘も、雁がねも、一所に床屋の店に見た。が、雁がねの臆面^{おくめん}なく白粉を塗りつつ居たのは言うまでもなからう。

——小一按摩のちびな形が、現に、夜泣松の枝の下へ、仮装の一個^{ひとつ}として顕^{あらわ}れている——

按摩の謙齋が、療治しつつ欣七郎に話したのは——その夜、食後の事なのであった。

「半助さん、半助さん。」

すらすらと、井菊の広い帳場の障子へ、姿を見せたのはお桂さんである。

あの奥の、花の座敷から来た途中は——この家での北国だという——雪の廊下を通った事は言うまでもない。

カチリ……

ハツと手を挙げて、珊瑚さんごの六分珠ろくぶだまをおさえながら、思わず膠にかわについたように、足首からむずむずして、爪立こづまったなり小棲こづまを取って上げたのは、謙斎の話の舌とともに、蛞蝓なめくじのあとを踏んだからで、スリッパを脱ぎ放しに釘でつけて、身ぶるいをして衝つと抜いた。湯殿から蒸しかかる暖い霧も、そこで、さつと肩に消え

て、池の欄干を伝う、緋鯉ひこいの鰭ひれのこぼれかかる真白まっしろな足袋はだしは、素足よりなお冷い。で……霞へ渡る反橋そりばしを視みれば、そこへ島田に結った初々しい魂が、我身を抜けて、うしろ向きに、気もそぞろに走る影がして、ソツと肩をすぼめたなりに、両袖を合せつつ呼んだのである。

「半助さん……」ここで踊屋台を視みた、昼の姿は、鯉を遊あそばせた薄うすもみじのさざ波であつた。いまは、その跡を慕おもつて大鯰おおなまずが池から雫しずくをひたひたと引いて襲けう氣勢けいはいがある。

謙斎の話は、あれからなお続いて、小一の顕われた夜泣松だが、土地の名所の一つとして、絵葉書で売るのは場所が違ちがう。それ

は港街道の路傍みちばたの小山の上に枝ぶりの佳いを見立てたので。

——真の夜泣松は、汽車から来る客たちのこの町へ入る本道に、

古い石橋の際に土をあわれに装もつて、石地藏が、苔蒸こけむし、且つ碎

けて十三体。それぞれに、櫛しきみ、線香を手向けたのがあつて、十三

塚と云う……一揆いつきの頭目でもなし、戦死をした勇士でもない。き

いても気の滅入めいはいる事は、むかし大饑饉おおききんの年、近郷から、湯の煙

を慕もつて、山谷さんこくを這出はいでて来た老若男女ろうにやくなんによの、救われずに、菜

色して餓死した骨を拾い集めて葬つたので、その塚に沿った松な

ればこそ、夜泣松と言うのである。——昼でも泣く。——仮装し

た小按摩の妄念は、その枝下、十三地藏とは、間に水車の野川が

横に流れて石橋の下へ落ちて、香都良川へ流込む水筋を、一つ跨また

いだ処に、黄昏たそがれから、もう提灯を釣つるして、裾すそも濡れそうに、ぐしやりと踞しゃがんでゐる。

今度出来た、谷川に架けた新石橋は、ちょうど地蔵の斜すじむか向い。でその橋向うの大旅館の庭から、仮装は約束のごとく勢揃をして、温泉の町へ入ったが、——そう云つてはいかがだけれど、饑饉どし年の記念だから、行列が通るのに、四角な行燈あんどんも肩を円くして、地蔵前を半輪はんわによけつつ通った。……そのあとへ、人魂ひとたまが一つ離れたように、提灯の松の下、小按摩の妄念は、列の中へ加わらずに孤影けいぜん然として残っている。……

ぬしは分らない、仮装であるから。いずれ有志の一人と、仮装なかまで四五人も誘ったが、ちよつと手を引張ひっぱつても、いやその

手を引くのが不気味なほど、正しょうのものの身投げ按摩で、びくとも動かないでいる。……と言うのであった。

——これを云った謙斎は、しかし肝心な事を言いわすれた、あとで分ったが、誘うにも、同行を促すにも、なかまがこもごも声を掛けたのに、小按摩は、おくびほども口を利かない。「ぴい、ぷう。」舌のかわりに笛を。「ぴいぷう」とただ笛を吹いた。――

半ば聞ずてにして、ずっと袖の香とともに、花の座敷を抜けた夫人は、何よりも先にその真偽のほどを、――そんな事は遊びずきだし一番明あかるい――半助に、あらためて聞こうとした。懸念に処

する、これがお桂のこの場合の第一の手段であつたが。……

居ない。

「おや、居ないの。」

一層袖口を引いて襟冷く、少しこごみ腰に障子の小間こまから覗くと、鉄の大火鉢ばかり、誰も見えぬ。

「まあ。」

式台わきの横口にこう、ひよこりと出るなり、モオニングのひよろりとしたのが、とまずシルクハットを取つて高慢に叩頭おじぎしたのは……

「あら。」

附髯つけひげをした料理番。並んで出たのは、玄関下足番の好男子で、

近頃夢中になつてゐるから思いついた、頭から顔一面、厚紙を貼つて、胡粉ごふんで潰つぶした、不斷女の子を悩ませる罪滅しに、真赤まつかに塗つた顔なりに、すなわちハアトワッの一である。真赤な中へ、おどけて、舌を出しておじぎをした。

「可い厭だ。……ちよいと、半助さんは。」

「あいつは、もう。」

揃つて二人ともまたおじぎをして、

「昼間っから行方知れずで。」

と口々に云う処へ、チャンチキ、チャンチキ、どどどん、ヒューラが、直ぐそこへ。——女中の影がむらむらと帳場へ湧わく、客たちもぞろぞろ出て来る。……血の道らしい年増の女中が、裾すそな

長^がにしよろしよろしつつ、トランプの顔を見て、目で嬌態^{しな}をやつて、眉をひそめながら肩でよれついたのと、入交^{いれまじ}つて、門際へどつと駈出^{かけだ}す。

夫人も、つい誘われて門^{かど}へ立った。

高張^{たかはり}、弓張^{ゆみはり}が門の左右へ、掛渡した酸漿提灯^{ほおずきちようちん}も、燦^{ぱつ}と

光が増したのである。

桶屋^{おけや}の風^{たこ}は、もう唸^{うな}つて先へ飛んだろう。馬二頭が、鼻あらし

を霜夜にふつつつと吹いて曳^ひく囃子屋台を真中^{まんなか}に、磽^{こうかく}たる

石ころ路^{みち}を、坂なりに、大師道^{みち}のいろはの辻のあたりから、次第

さがりに人なだれを打って来た。弁慶の長刀^{ながなた}が山鉾^{やまぼこ}のように、

見える、見える。御曹子^{おんぞうし}は高足駄、おなじような桃太郎、義士

の数が三人ばかり。五人男が七人居て、雁^{かり}がねが三羽揃った。：
：チャンチキ、チャンチキ、ヒューラと囃^{はや}して、がつたり、がく
り、列も、もう乱れ勝^{がち}で、昼の編笠をてこ舞に早がわりの芸妓^{げいしや}
だちも、微醉^{ほろよい}のいい機嫌。青い髻^{ひげ}も、白い顔も、紅^{べに}を塗ったの
も、一斉にうたうのは鰯^{どじょう}すくいの安来節^{やすぎふし}である。中にぶツぶツ
ぶツぶツと喇叭^{らっぱ}ばかり鳴すのは、——これはどこかの新聞でも見
た——自動車のつくりものを、腰にはめて行く^{ゆく}のである。

時に、井菊屋はほとんど一方の町はずれにあるから、村方へこ
ぼれた祝^{いわいば}場を廻^{すま}り済して、行列は、これから川^{かわ}向^{むこう}の演芸館
へ繰込むの、いまちようど退汐^{ひきしおどき}時。人は一倍群^{ぐん}つたが、向側^{むかえ}
が崖^{がけぞい}沿^{ぞい}の石垣で、用水^{ながれ}の流^{ながれ}が急激に走るから、推^おされて踏^{ふみ}はず

す憂^{うれい}があるので、群集は残らず井菊屋の片側に人垣を築いたため、背後^{うしろ}の方の片袖の姿斜めな夫人の目には、山から星まじりに、祭屋台が、人の波に乗つて、赤く、光つて流れた。

その影も、灯^{とも}も、犬が三匹ばかり、まごまご^{しんがり}殿しながらついて、川端の酸漿提灯の中へぞろぞろと黒くなつて紛れたあとは、^{たたず}イんで見送る井菊屋の人たちばかり。早や内へ入るものがあつて、急に寂しくなつたと思うと、一足^{おく}後れて、暗い坂から、——異形^{いぎよう}なもの^{いぼいぼ}が下りて来た。

疣^{いぼ}々^{いぼ}打つた鉄棒^{かなぼう}をさし荷^{にな}いに、桶屋も籠屋^{かごや}も手伝つたろう。張^{はりぬき}拔^{ぬき}らしい真黒^{まっくろ}な大釜^{おおがま}を、蓋^{ふた}なしに担^かいだ、牛頭^{ごず}、馬頭^{めず}の青鬼、赤鬼。青鬼が前へ、赤鬼が後棒^{あとぼう}で、可恐^{おそろ}しい面^{かぶ}を被^かつた。

縫いぐるみに相違ないが、あたりが暗くなるまで真に迫った。
…大釜の底にはめらめらと真赤な炎を彩^{まっか}つて燃^{もや}している。

青鬼が、

「ぼうぼう、ぼうぼう、」

赤鬼が、

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

と陰気な合言葉で、国境の連山を、黒雲に背負^{しよ}つて顕^{あらわ}れた。

青鬼が、

「ぼうぼう、ぼうぼう、」

赤鬼が、

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

よくない洒落だ。しやれ——が、訳がある。……前に一度、この温泉

町で、桜の盛に、さかり仮装会を催した事があつた。その時、墓を出た

骸骨を装つて、がいこつ出歯をむきながら、卒堵婆を杖について、ひよ

ろひよろ、ひよろひよろと行列のあとの暗がりを縫つて歩行い

女小児を怯えさせて、こども おびそれが一等賞になつたから。……

地獄の釜も、按摩の怨念も、おんねんそれから思着いたものだと思う。

一国の美術家でさえ模倣を行、やいわんや村の若衆わかしゅにおいてをや、よくない真似をしたのである。

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

「あら、半助だわ。」

と、ひとりの若い女中が言った。

石を、青と赤い踵かかとで踏んで抜けた二頭の鬼が、後うしろから、前を引

いて、ずしずしと小戻りして、人立ひとだちの薄さに、植込うきこの常磐ときぎ

木わざの影もあらわな、夫人の前へ寄つて来た。

赤鬼が最も著しい造つくり声こゑで、

「牛頭ごずよ、牛頭よ、青牛よ。」

「もうー、」

と牛の声で応じたのである。

「やい、十三塚にけつかる、小按摩な。」

「もう。」

「これから行つて、釜ふちこへ打込め。」

「もう。」

「そりや——歩^{あゆ}べい。」

「もう。」

「ああ、待つて。」

お桂さんは袖を投^なげて一^{ひと}歩^{あし}して、

「待つて下さいな。」

と釜のふちを白い手で留めたと思うと、

「お熱^{つつ}々。」

と退^{すき}つて耳^{みみ}を圧^{おさ}えた。わきあけも、襟も、乱るる姿は、電燭^{でんき}の

霜^{しも}に、冬牡丹^{ふゆぼたん}の葉ながらくずるようであつた。

四

「小一さん、小一さん。」

たとえば夜の睫毛まつげのような、墨絵に似た松の枝の、白張しらはりの提

灯は——こう呼んで、さしうつむいたお桂の前髪を濃く映した。

婀娜あだにももの優しい姿は、コオトも着ないで、襟に深く、黒に紫

の裏すいた襟巻をまいたまま、むくんだ小按摩の前に立って、そ
と差覗さしのぞきながら言つたのである。

棲つまが幻のもみじする、小流こながれを横に、その一ひとすじ条の水を隔てて、

今夜は分けて線香の香の芬ぶんと立つ、十三地藏の塚の前には外套がいとう
にくるまって、中折帽なかおれぼうを目深く、欣七郎ステッキが杖をついてゐんだ。

（——実は、彼等が、ここに夜泣松の下を訪れたのは、今夜これで二度めなのであつた——）

はじめに。……話の一筋が齒に挟はさまつたほどの事だけれど、でも、その不快について処置をしたさに、二人が揃よつて、祭の夜を見物かたがた、ここへ来た時は。……「何だ、あの謙齋か、按摩め。

こくめいで律儀らしい癖に法螺ほらを吹いたな。」そこには松ばかり、地蔵ばかり、水ばかり、何の影も見えなかつた。空の星も晃きら々々として、二人の顔も冴さ々々さえと、古橋を渡りかけて、何心なく、薬研げんの底のような、この横よこ流ながれの細滝に続く谷川の方を見ると、岸から映るのではなく、川瀬に提灯が一つ映つた。

土地を知つた二人が、ふとこれに心を取られて、松の方かたへ小屋

りして、向合つた崖縁に立つて、谿河^{たにがわ}を深く透かすと、——こ
こは、いまの新石橋が架^からない以前に、対岸から山伝いの近道す
るのに、樹の根、巖角^{いわかど}を絶壁に刻んだ径^{こみち}があつて、底へ下りる
と、激流の巖から巖へ、中洲の大巖で一度中絶えがして、板ばか
りの橋が飛々^{とびとび}に、一煽^{ひとあお}り翻つて落つる白波のすぐ下流は、た
ちまち、白昼も暗闇^{やみ}を包んだ釜ヶ淵なのである。

そのほとんど狼の食い散^{ちら}した白骨のごとき仮橋の上に、陰気な
暗い提灯の一つ灯^びに、ぼやりぼやりと小按摩が蠢^{うご}めいた。

思いがけない事ではない。二人が顔を見合せながら、目を放さ
ず、立つうちに、提灯はこちらに動いて、しばらくして一度、ふ
わりと消えた。それは、巖^{いわ}の根にかくれたので、やがて、縁日も

のの竜燈のごとく、どうきこずえ雑樹の梢へかかった。それは崖へ上つて街道へ出たのであつた。

——その時は、お桂の方が、衝と地藏の前へ身を躲すと、街道を横に、夜泣松の小按摩の寄る処を、

「や、御趣向だなあ。」と欣七郎が、のつけに快活に碎けて出て、
「疑いなしだ、一等賞。」

小按摩は、何も聞かない振をして、蛙が手をくがごとく、指で搜りながら、松の枝に提灯を釣すと、謙斎が饒舌つた約束のごとく、そのまま、しよぼんと、根に踞んで、つくばい立の膝の上へ、だらりと両手を下げたのであつた。

「おい。一等賞君、おい一杯飲もう。一所に來たまえ。」

その時だ。

「ぴい、ぷう。」

笛を銜くわえて、唇を空くわぎまに吹上げた。

「分ったよ、一等賞だよ。」

「ぴい、ぷう。」

「さ、祝杯を上げようよ。」

「ぴい、ぷう。」

そらうそぶ
空 嘯そらうそぶいて、笛を鳴す。

夫人が手招きをした。何が故に、そのうしろに竜女の祠ほこらがないのであろう、塚の前に面影に立った。

「ちえッ」舌うちとともに欣七郎は、強情、我慢、且つ執拗しつような

小按摩を見棄てて、招かれた手と肩を合せた、そうして低声こゝろこえをかわしかわし、町の祭の灯の中へ、並んでスツと立去った。

「ぴい、ぷう。……」

「小一さん。」

しばらくして、引返して二人来た時は、さきにも言った、欣七郎が地蔵の前に控えて、夫人自ら小按摩に対したのである。

「ぴい、ぷう。」

「小一さん。」

「ぴい、ぷう。」

「大島屋の娘はね、幽霊になってしまったのよ。」

と一歩^{ひとあし}ひきさま、

暗い方に隠れて待った、あの射的店の幽霊

を——片目で覗いていた方のである——竹^{たけ}棹^{ざお}に結^{ゆわ}えたなり、ず

るりと出すと、ぶらりと下つて、青い女が、さばき髪とともに提

灯^なを舐めた。その幽霊の顔とともに、夫人の黒髪、びん搔^{かき}に、当

代の名匠が本質^{きじ}へ、肉筆で葉を黒^{くろうるし}漆一面に、緋^ひの一輪椿^{くし}の櫛

をさしたのが、したたるばかり色に立つて、かえつて打仰いだ按

摩の化ものの真向^{まっこう}に、一太刀、血を浴びせた趣があつた。

「一所に、おいでなさいな、幽霊と。」

水ぶくれの按摩^{おもて}の面は、いちじくの実の腐れたように、口をえ

みわつて、ニヤリとして、ひよろりと立った。

お桂さんの考^{かん}慮^{がえ}では、そうした……この手段を選んで、小按

摩を芸妓屋町の演芸館。……仮装会の中心点へ送込もうとしたのである。そうしてしまえば、ねだ下、天井裏のばけものまでもない……雨戸の外の葉裏にいても気味の悪い芋虫を、銀座の真まんな中へ押放したも同然で、あとは、さばさばと寐覚ねぞめが可い。

……思いつきで、幽霊は、射的店で借りた。——欣七郎は紳士だから、さすがにこれは阻はばんだので、かけあいはお桂さんが自分でした。毛氈もうせんに片膝のせて、「私も仮装をするんですわ。」令夫人といえども、下町娘だから、お祭り気は、頸脚えりあしに幽な、肌は濡だ絆じゅばんほどは紅くれなひに膚はだを覗いた。……

もう容易たやすい。……つくりものの幽霊を真中まんなかに、小按摩と連立れんりつって、お桂さんが白木の両ぐりを町に鳴すと、既に、まばらに、

消えたのもあり、消えそうなのもある、軒提灯の蔭を、つかず離れず、欣七郎が護まもつて行く。

芸妓屋町へ渡る橋手前へ、あたかも巨おおでら寺の門前へ、向うから渡る地蔵の釜かま。

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

「や、小按摩が来た……出掛けるには及ばぬわ、青牛よ。」

「もう。」

と、吠ほえる。

「ぴい、ぷう。」

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

そこで、一行異形のものは、^{あひる}驚の夢を踏んで、橋を渡った。

鬼は、お桂のために心を配って来たらしい。

演芸館の旗は、人の顔と、頭との中に、電飾に輝いた。……町

の角から、館の前の広場へ^{つま}ひしと詰って、露台に^{あふ}溢れたからであ

る。この時は、軒提灯のあと始末と、火の用心だけに家々に残つ

たもののほか、町を挙げてここへ詰^い掛けたと言って可い。

そのかわり、群集の一重^{ひとえ}うしろは、道を白く引いて寂^{しん}然として

いる。

「おう、お嬢さん……そいつを持ちます、俺の役だ。」

赤鬼は、直ちに半助の地声であった。

按摩の頭は、提灯とともに、人垣の群集の背後^{うしろ}についた。

「もう、要らないわ、此店^{ここ}へ返して、ね。」

と言った。

「青牛よ。」

「もう。」

「生白^{さかな}い、いい肴^{さかな}だ。釜で煮べい。」

「もう。」

館の電飾が流るるように、町並の飾竹が、桜のつくり枝とともに颯^{さっ}と鳴った。更けて山^{やま}風^{おろし}がしたのである。

竹を掉^{ふる}抜^{いぬ}きに、たとえば串^{すな}から倒^{たふ}に幽霊^{さかさ}の女を釜の中へ入れ

ようとした時である。砂礫^{すなつぶて}を捲^まいて、地を一陣の迅^とき風がび

ゆうと、吹添うと、すつと抜けて、軒を斜ななめに、大屋根の上へ、あれあれ、もの干を離れて、白帷子しろかたびらの裾すそを空に、幽霊の姿は、煙え筒んとつの煙が懷手をしたように、遙はるかに虚空へ、遙に虚空へ――
 群集はもとより、立溢たちあふれて、石の点頭うなずくがごとく、踞かがみながら視みていた、人々は、羊のごとく立つて、あツと言った。
 小一按摩の妄念も、人混ひとごみの中へ消えたのである。

五

土地の風説に残り、ふとして、浴客の耳に伝うる処は……これ
 だけであらうと思う。

しかし、少し余談がある。とにかく、お桂さんたちは、来た時のように、一所に二人では帰らなかった。――

風に乗って、飛んで、宙へ消えた幽霊のあと始末は、半助が赤鬼の形相のままで、蝙蝠バットを吹かしながら、射的店へ話をつけた。此奴こいつふんどしは禪にするため、野良猫の三毛を退治たいじで、二月越内証ふたつきごしなishoで、もの置おきで皮を乾ほしたそうである。

笑話の翌朝は、引続き快晴した。近山裏の谷間には、初茸はつたけの残り、乾からびた占地茸しめじもまだあるだろう、山へ行く浴客も少くなかった。

お桂さんたちも、そぞろ歩行あるきした。掛稲かけいねに嫁菜の花、大根

畑に霜の濡色も暖い。

畑中の坂の中途から、巨刹おおでらの峰におわす大観音に詣でる広い道が、松の中を上りになる山のぼ懷やまふところを高く蜿蜒うねつて、枯草葉の径こみちが細く分れて、立札の道しるべ。歡喜天御堂、と指ゆびさして、……福德を授け給う……と記してある。

「福德つて、お金ばかりじゃありませんわ。」

欣七郎は朝飯前あさはんの道がものういと言うのに、ちよいと軽い小競合ぜりあいがあつたあとで、参詣おまいりの間を一人待つ事になった。

「ここを、……わきへ去いつては可厭いやですよ……一人ですから。」

お桂さんは勢いきおいよく乾いた草を分けて攀よじ上った。欣七郎の目に、その姿が雑樹ぞうきに隠れた時、夫人の前には再びやや急な石段が頭あちわ

れた。軽く喘あえいで、それを上ると、小高い皿地の中窪みに、垣も、折戸もない、破あばらや屋が一軒あつた。

出た、山の端はに松が一樹。幹のやさしい、その見晴しで、ちよつと下に待つ人を見ようと思つたが、上つて来た方は、紅こうぼう薔と粉壁ふんぺきと、そればかりで夫は見えない。あと三方はまばらな農家を一面の畑の中に、弘法大師奥の院、四十七町いろは道が見えて、向うの山の根を香都良川が光つて流れる。わきへ引込んだ、あの、辻堂の小さく見える処まで、昨日、午ひるごろ夫婦ふたりで歩行あるいた、——かえつてそこに、欣七郎の中折帽が眺められるようである。

ああ、今朝もそのままな、野道を挟んだ、飾竹に祭提灯の、稲

田ずれに、さらさらちらちらと風に揺れる処で、欣七郎が巻煙まきたば草こを出すと、燐寸マツチを忘れた。……道の奥の方から、帽子も被かぶらないで、土地のものらしい。霜げた若い男が、蠟燭ろうそくを一束買つたらしく、手にして来たので、湯治場の心安さ、遊山ゆさん気分で声を掛けた。

「ちよいと、燐寸はありませんか。」

ぼんやり立停たちどまつて、二人を熟じつと視みて、

「はい、私わしどもの袂たもとには、あつても人魂ひとたまでしてな。」

すたすたと分れたのが、小上りの、畦あぜを横に切れて入った。

「坊主らしいな。……提灯の蠟燭を配るのかと思つたが。」

俗ではあつたが、うしろつきに、欣七郎がそう云つた。

そう言った笑顔に。——自分が引添うているようで、現在、いま朝湯の前でも乳のほてり、胸のときめきを幹でおさえて、手を遠見に翳かざすと、出端でばなのあし許もとあやうの危さに、片手をその松の枝にすがった、浮腰を、朝風が美しく吹靡ふきなびかした。

しきつて棲つまを合せた、夫に對する、若き夫人の優しい身だしなみである。

まさか、この破屋に、——いや、この松と、それより梢こずえの少し高い、對つひの松が、破屋の横にややまた上のぼりざか坂の上にあつて、根は分れつつ、枝は連理つらなに連つた、濃い翠みどりの色越いろごしに、額を捧げて御堂がある。

夫人は衣紋えもんを直しつつ近着いた。

近づくと、

「あッ、」

思わず、忍しのび音ねを立てた——見透みすかす六尺ばかりの枝に、倒さかさまに裾を巻いて、毛を蓬おどろに落ちかかったのは、虚空に消えた幽霊である。と見ると顔が動いた、袖へ毛だらけの脚が生え、脇腹の裂目に獣の尾の動くのを、狐とも思わず、気は確たしかに、しかと犬と見た。が、人の香を慕ったか、そばえて幽霊を噛かみちらし、まつわり振った、そのまま、裾を曳ひいて、ずるずると寄つて来るのに、はらはらと、慌あわただしく踵きびすを返すと、坂を落ち下りるほどの間まさえなく、帯腰へ疾とく附くっ着いて、ぶるりと触るは、髪か、顔か。

花の吹雪に散るごとく、裾も袖も輪に廻つて、夫人は朽ち腐れ

た破屋の縁へ飛とび縋すがった。

「誰か、誰方どなたか、誰方か。」

「うう、うう。」

と寝惚ねぼけ声こえして、破障子やぶれしやうじを開けたのは、頭も、顔も、その

ままの小一按摩の怨念であつた。

「あれえ。」

声は死んで、夫人は倒れた。

この声が聞えるのには間遠まどおであつた。最愛最惜の夫人の、消息

の遅さを案じて、急せき心こころに草を攀よじた欣七郎は、歡喜天の御堂

より先に、たとえば孤屋ひとつやの縁外えんそとの欠けた手水鉢ちやうずばちに、ぐつた

りと頤あごをつけて、朽木の台にひざまずいて縋あごつた、青ざめた幽霊

を見た。

横ざまに、杖で、ステツキ 敲き払った。が、ひとげはい 人氣勢のする破障子を、
及腰に差覗くと、目よりも先に鼻を撲った、このふきぬけ
の戸障子にも似ず、したたかな酒の香である。

酒ぎらいな紳士は眉をひそめて、手巾で鼻を蔽いながら、密と再び覗くと齊しく、色が変わって真蒼になった。

竹の皮散り、貧乏徳利の転ころがった中に、小一按摩は、夫人に嚙かじりついていたのである。

読む方は、筆者が最初に言ったある場合を、ごく内端うちわに想像させるが可い。

小一に仮装したのは、この山の麓ふもとに、井菊屋の畠の畑づくりの
老僕と日頃懇意な、一人ひとりずみ棲すの堂守であつた。

大正十四（一九二五）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二卷」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怨霊借用

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>